

# 書写力向上をめざして

## —基礎・基本とその応用—【第47回】

### 「書写の要素」について ④6 〈筆順(4)〉

山梨大学大学院教育学研究科教授 宮澤 鷺州

筆順は、字形を整える上で極めて重要な要素となっています。

先月号では、『筆順指導の手びき』から、筆順の「原則1〈横画がさき〉」を取り上げました。今月号は、引き続き、筆順の「原則2」「原則3」について見ていきます。



#### 『筆順指導の手びき』の内容(三)

#### (1)筆順の原則の解説

先月号に引き続き、「筆順の原則」を解説していきます。

##### ①原則2〈縦画があと〉

筆順の「原則2」は次頁の表のように示されて

います。

「原則2」では、原則1の「横画がさき」とは逆で、「横画があと」となる筆順を「田」と「王」の字例を元に原則化しています。

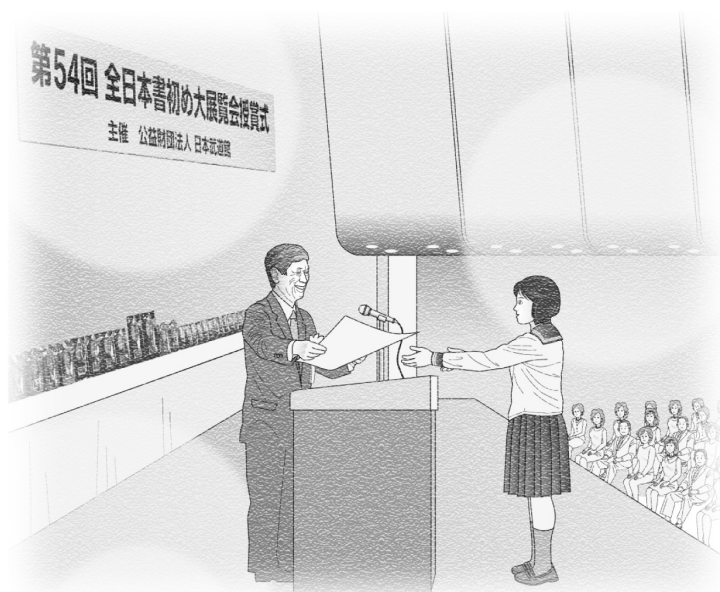
##### ②田

②の「田」の内部にある「十」の筆順は、原則1とは異なり、「縦↓横」の順を原則として挙げています。原則1との違いがどこにあり、何を根拠としているのかは明確ではありません。そこで、

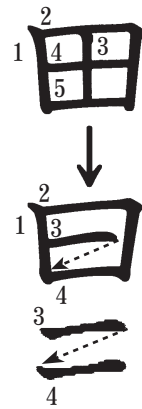
牽強付会を恐れず仮説を立ててみました。

「田」の三画目の縦画を抜いてみましょう。するとその形は「日」の形になります。当然ながら、内部の横画に次いで最終画の横画がワンセットで連続して書かれます。この二つの横画はどのような場合にもセットになって書かれると捉えれば、そこにどのような画が入り込んで書かれようとも最後に「横↓横」のセットで文字の完成となるのではないのでしょうか。

ただし、縦画が最下部に位置する横画を貫く



場合は適応しないようです。「申・甲・平」などがこれに相当しますが、これに関しては「原則6〈つらぬく縦画は最後〉」（先月号19頁の表参照）で原則化されています。



横画はセットで連続して書く

申・甲・平

縦画が下に貫く場合は縦画を最後に書く

「田」を持つ他の字例として「男・異・町」が挙げられています。その他、「思・魚・勇・番・富・略・副・畑・細」などを挙げるができます。

田・男・異・町・思・魚・勇・番・富・略・副・畑・細

筆順の「原則2」（宮澤正明著『きれいな文字の書きかた』二玄社刊・42頁より）

原則2 横画があと



横画と縦画とが交差したときに、下記の場合は、横画をあとに（原則1の例外）。

①田	田（口田田田）	男 異 町
②田の発展したもの	由（巾巾巾由）	油 曲 角
③王	王（一丁干王）	主 美 差
④王の発展したもの	進（竹竹竹進）	馬 麦 寒

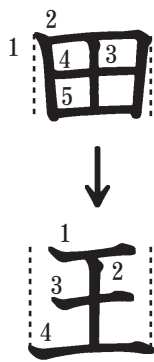
⑥田の発展したもの

⑥の「田の発展したもの」の字例には「油・曲・角」が示されています。上に示した仮説から「油」の「由」、「曲」、「角」も「田」と同様にすべて「横↓横」のセットがあるので、縦画（複数であっても）を優先して書いた後に「横↓横」となるのだと思われれます。同様の漢字では「豊・解」などがあります。

油・曲・角・豊・解

◎王

⑦の「王」の筆順は、「横↓縦↓横↓横」であることを原則ととしています。「田」の二画目と二画目の縦画部を除くと「王」の形が残ります。



とすれば、「王」の筆順は自ずから「横↓縦↓横↓横」となります。字例として挙げられている「主・美・差」も同様です。

その他の例としては「玉・国・理・球・望・注・柱・程・宝・聖・班・養・義・議・着」等を挙げることができます。

王・主・美・差・玉・国・理・球・望・注・柱・程・宝・聖・班・養・義・議・着

なお、「王」の字源は「鉞」（マサカリ）の象形です。甲骨文、金文にその原型が見られます。

その後の小篆では原型をとどめて上二本の横画を詰めて書き、最後の横画は画間を空けて離して書かれています。

次の隸書になると横画間はほぼ等しくなり、今日の楷書に近づきます。この展開では、小篆までの筆順は上二本の横画は先に書かれ、その後、「縦↓横」に書かれると捉えるのが自然です。

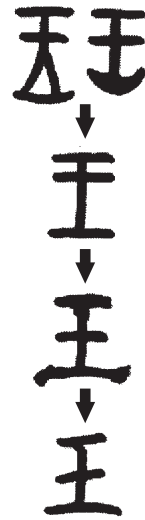
現在の中国では「王」の筆順は「横↓横↓縦↓横」の筆順で指導されています。同形は同じ筆順、という原則で筆順を定めている中国ではありますが、図らずも字源に即した筆順になっているとも言えます。

同形の「玉」は図1のように甲骨文では縦画に

横画が何本も交わる姿で書かれ、いくつかの玉を紐に通した様<sup>さま</sup>で、飾り玉、すなわち、今で言えば、真珠のネックレスのような形です。その後は縦画が上下の横画から飛び出さない形が定着し、まさに「王」と同形になりました。

さらに「王」との区別を図るために隸書では最後に点を加え「王」との差別化を図ったようです。

「王」の変化



「玉」の変化

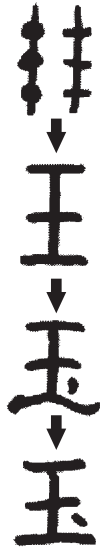


図1 「王・玉」の変化

④王の発展したもの

④の「王の発展したもの」として「進」が挙げられています。横画が複数になっても「縦↓横」の筆順の原則となります。「佳」(ふるとり)は様々な筆順が生じやすいので注意が必要です(図2参照)。類似字例として「馬・麦・寒」が挙げられています。

「佳」の他の字例として「曜・集・観・準・雑・護・確・権・奮」などを挙げることができ、「馬」では、「駅・験」など、「麦」では「青・責・毒」など、「寒」では「講・構」などを挙げることができます。

佳



図2 「佳」の筆順

馬・麦・寒・曜・集・観・準・雑・護・確・権・奮、駅・験、青・責・毒、講・構

②原則3〈中がさき〉

筆順の「原則3」は次頁の表のように示されています。

「原則3」では、「中と左右があって、左右が一、または二画である場合は、中をさきに」と示され、代表的字例として「小」が挙げられています。三つの部分が左右に並ぶ形の筆順と捉えることがで

きます。

これは大原則の「左から右へ」を破っていることとなりますが、ほぼ左右対称形の場合はその限りではなく、図3のように「中心から書き始め、左側そして右側」の順に書くということになります。

他の字例として「当・水・衆・業・赤・楽・承・率」が挙げられています。

「当」の旧字体は「當」で「尚」を主要部分としています。他の事例では「堂・常・党」などがあり、「水」に近い漢字では「氷・永・求・様」などを挙げることができます。

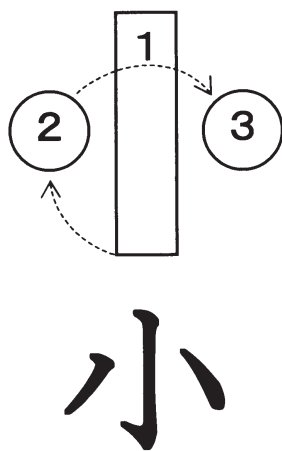


図3 「左右対称系」の筆順

当(當)・堂・常・党、水・氷・永・求・様、衆・業・赤・楽・承・率

なお、例外として「性」の「忄」(りっしんべん)、「火」が挙げられています。

原則3

中がさき

小

中と左右があつて、左右が「」、または二画である場合は、中をさきに。

小（「小」） 当 水 衆 業 赤 染 承 率  
 【例外】 性（「性」） / 火（「火」） 秋 炭 焼

筆順の「原則3」（宮澤正明著『きれいな文字の書きかた』二玄社刊・42頁より）

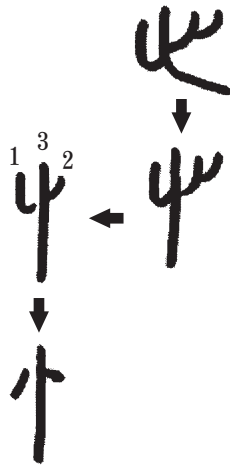
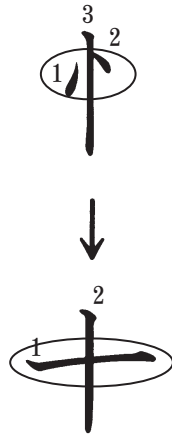


図4 「十」の変化と筆順



また、「火」も構造上は原則3に当てはまりませんが、左右の払いと点が両側にある場合は当てはまりません。これについて、次のように考えるとわかりやすくなります。「十」と「火」に書かれるそれぞれの点をつねると横画になります。すると「十」は「十」と同形になり、筆順は「横画（左右の点）↓縦画」になります。「十」が「協・博」などの偏の「十」と同形になることを知れば、誤りにくいと思われ

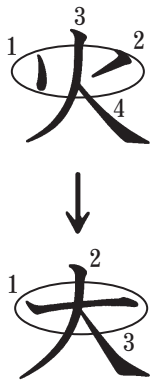
協・博

「十」が「十」と同様の筆順であることを裏付けていると言えるでしょう。

ちなみに、「協・博」の「十」は針の象形（武器だとする説もあります）で、後に数字の「十」に当てられることになりました。「一つにまとめる」との意味を持ち、「協」は、多くの力をひとまとまりにするといった意味になります。

「博」の「十」は「多い」の意味になり、旁は田に苗を植える意味で、「広くいきわたる」といった意味になるようです。

また、「火」は「大」と同形になって、筆順は「横画（左右の点）↓左払い↓右払い」になります。



以下、次号に続きます。